

ふるさとの風

～霜月～

# 深山幽谷

— 静寂の秋 —

錦秋

伊勢神宮参道からわずかに奥に入るとそこは、静寂さが守られている神域。神宮の森は四季折々の変化をみせる。五十鈴川御手洗場近くに鎮まる瀧祭神、ここから風日祈宮橋・風日祈宮辺りは、紅葉があでやかに彩り、ひときわ趣のある風情。神域の中でも格別に美しい空間がそこにある。

風日祈宮は風雨をつかさどる神様。祭神は伊弉諾尊<sup>いざなぎのみこと</sup>の御子母である級長津彦命<sup>しなつひこのみこと</sup>と級長戸辺命<sup>しなとべのみこと</sup>。皇大神宮儀式帳には風神社<sup>ふうじんのやしろ</sup>と記されている。万葉集の時代から伊勢の枕詞は「風神の」であった。鎌倉時代元寇の時には、神風を吹かせわが国に勝利をもたらした事から、末社から別宮に昇格したと伝えられる。「風日祈」とは風雨の害なく五穀が豊作となるよう祈る神事のこと。古来7月から8月末日まで毎日風日祈の神事が行われていたが、現在、風日祈祭は5月14日と8月4日の二度である。

太神宮 風宮 五十鈴川御橋  
明応七年 戊午 本願観阿弥敬白

風日祈宮橋、南側西詰の欄干擬宝珠に陰刻された五行の金石文。室町時代、架橋についていかに苦心献身があったか、その歴史を伝えている。

擬宝珠は八基、両宮で宇治橋に次ぐ木造橋である。その姿はまるで、参拝者に小さな宇治橋を思いおこさせるようにもみえる。

橋の左岸に僧尼拝所がある。明治維新まで神前に近づけなかった僧侶や頭を丸めた人々が、五十鈴川の対岸から御正宮をはるかに伏し拝み、空間を隔て感銘を受けていた。

なにごとの おはしますかは 知らねども かたじけなさに 涙こぼるる 西行法師

さらさらと川のせせらぎが響く。それほど周囲の木立の茂みも深いのである。橋上から眺める風景はまるで神々が絵筆をふるわれたようである。

季節のうつろいを感じ取れる時季。

清らかな五十鈴川の流れも晩秋には紅葉の装い。やがて冬景色—。

平成25年式年遷宮の一環で風日祈宮橋の架け替えが終了。

そして渡り初めが行われたのは記憶に新しい。

—9月17日 初秋

◆ 神都名勝誌 巻四～巻六 (神宮司廳／編 皇學館大学 L243／シ／2)

◆ 群書類従 第一輯 神祇部 皇大神宮儀式帳

(塙保己一／編纂 続群書類従完成会 L081／ダ／1)

◆ 伊勢神宮 知られざる杜のうち (矢野憲一／著 角川学芸出版 L174／ヤ)

◆ 伊勢神宮 (桜井勝之進／著 学生社 L174／サ)

図書館だより  
2010年11月号より